病害虫発生予察情報(11 月予報)

令和８年 10 月 29 日
静岡県病害虫防除所長

１　予報概況

作物名	病害虫名	予報 (11 月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	ミカンハダニ	発 生 量：並 ただし、西部：多 (寄生葉率 2.3%)	10 月上中旬発生量：並 (±) ただし、西部で多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
トマト	葉かび病・ すすかび病	発 生 量：並 (発病株率 10.3%)	10 月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	黄化葉巻病	発生量：並 (発病株率 1.4%)	10 月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋)
	コナジラミ類	発生量：並 (寄生株率 15.2%)	10 月中下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋)
だいこん	黒斑細菌病	発 生 量：やや多 (発病株率 0.4%)	10 月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	白さび病	発 生 量：並 (発病株率 0.1%)	10 月中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気　温：高い (－) 降水量：多い (＋)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：並 (発病株率 0.4%) アブラムシ類発生量：少 (寄生株率 0.6%)	10 月中旬発生量 モザイク病：並(発生なし) (±) アブラムシ類：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	コナガ	発 生 量：やや少 (寄生株率 0.1%)	10 月中旬発生量：少(発生なし) (－) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ナモグリバエ	発 生 量：やや少 (寄生株率 1.6%)	10 月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発 生 量：やや多 (発病株率0.9%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	菌核病	発 生 量：並 (発病株率0.2%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (±) 降水量：多い (＋)
	コナガ	発 生 量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ハスモンヨトウ	発 生 量：並 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：やや多～多 (＋) 病害虫防除員からの報告：多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	シロイチモジヨトウ	発 生 量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	アブラムシ類	発 生 量：やや少 (寄生株率0.7%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
ねぎ (白ねぎ)	さび病	発 生 量：並 (発病株率0.3%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気　温：高い (±) 降水量：多い (＋)
	黒斑病・葉枯病	発 生 量：やや多 (発病株率3.4%)	10月中旬発生量：やや少 (－) ネギアザミウマ発生量：多 (＋) 気象予報：気　温：高い (±) 降水量：多い (＋)
	シロイチモジヨトウ	発 生 量：多 (寄生株率0.4%)	10月中旬発生量：多 (＋) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：並 (±) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ネギアザミウマ	発 生 量：多 (寄生株率10.0%)	10月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ネギハモグリバエ	発 生 量：やや少 (被害株率25.3%)	10月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
レタス (非結球レタスを除く)	斑点細菌病	発 生 量：並 (発病株率0.1%)	10月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気　温：高い (－) 降水量：多い (＋)
	べと病	発 生 量：並 (発病株率0.2%)	10月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気　温：高い (－) 降水量：多い (＋)
	ハスモンヨトウ	発 生 量：並 (寄生株率0.2%)	10月中旬発生量：少(発生なし) (－) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：やや多～多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)
いちご	うどんこ病	発 生 量：やや少 (発病株率1.1%)	10月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋)
	炭疽病	発 生 量：やや少 (発病株率1.5%)	10月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋)
	アザミウマ類	発 生 量：多 (寄生株率2.1%)	10月中下旬発生量：やや多 (＋) ただし、中部で多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	アブラムシ類	発 生 量：やや少 (寄生株率4.9%)	10月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気　温：高い (＋)
	コナジラミ類	発生量：並 ただし、中部：多 (寄生株率6.1%)	10月中下旬発生量：やや少 (－) ただし、中部で多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	ハダニ類	発 生 量：多 (寄生株率14.9%)	10月中下旬発生量：やや多 (＋) ただし、中部で多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
	ハスモンヨトウ	発 生 量：やや多 (寄生株率0.4%)	10月中下旬発生量：並 (±) ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：やや多～多 (＋) 気象予報：気　温：高い (＋)
作物全般	オオタバコガ	発 生 量：やや多	ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ誘殺数：並～やや多(±～＋) 気象予報：気　温：高い (＋) 降水量：多い (－)

表の見方について

- 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

静岡県総合防除計画 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/nogyo/nouyaku/1003316/1062325.html

２　予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

＜生育の概況＞

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年よりやや早く、果実の肥大は平年並の産地が多いが、ばらつきがみられる。

●ミカンハダニ

予報の根拠

・10 月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 1.5%（平年 1.5%）と平年並だった。地域別では、東部での寄生は認められず（平年 0.1%）、中部で 0.7%（平年 2.1%）、西部で 3.8%（平年 2.4%）と西部での発生が多かった。

・１か月予報によると、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

＜その他の病害虫＞

●黒点病

・10 月上中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は 3.7（平年 2.7）と平年より多かった。

・樹冠内部の枯枝や剪定枝、切株などで本病の胞子が作られ、伝染源となる。来作に向けて冬期に伝染源は除去し、園内や周囲に放置しない。

●青かび・緑かび病

・10 月上中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は 0.1 個/樹（平年 0.2 個/樹）、落果発病果数は 0.8 個/樹（平年 0.9 個/樹）と平年並だった。

・樹上果、摘果果実ともに発病果を放置すると園内の菌密度を高める。見回りを行い、発病果は発見し次第速やかに園地の外に持ち出して処分する。

・防除を行う場合は、収穫前日数に注意して薬剤の選択をする。

・収穫時のハサミ傷や収穫コンテナに混入した枯れ枝や小石などによる傷は、感染を助長し貯蔵中の発病が増加する。果実の運搬や選果が手荒で果皮に傷が付く場合でも同様であるため、丁寧な収穫作業を行う。

・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、降雨後など果実に水滴が残っている場合は乾燥後に収穫する。

●褐色腐敗病

・10 月上中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は 0.3 個/樹（平年 0.1 個/樹）、落果発病果数は 3.5 個/樹（平年 1.1 個/樹）と平年より多かった。

・本病原菌は土壌中に生息しており、降雨による泥はねなどで樹上の発病が増加する。

・樹上果、摘果果実ともに発病果を放置するとほ場内の菌密度を高める。見回りを行い、発病果は発見し次第速やかに園地の外に持ち出して処分する。

・排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。土壌からの雨滴の跳ね返りを防止するためにマルチ栽培や樹冠下に敷ワラ、敷草を行う、果実を地表面から離すために結果枝のつり上げや下枝に支柱

を立てるなど耕種的防除に努める。

【かんきつ全般】

＜その他の病害虫＞

●かいよう病

・10 月上中旬の温州みかんの巡回調査では、果実の平均発病度は 0.3（平年 0.1）と平年より多かった。
・10 月上中旬の中晩柑類の巡回調査では、果実の平均発病度は 0.6（平年 0.7）と平年並だった。
・11 月以降に感染は起こらないが、冬期に発病枝葉の切除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育はやや早い～遅く、地域や生産者によりばらつきがある。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 1.8%（平年 11.6%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発病を助長する（生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 26～28℃程度で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

・本病は潜伏期間が２週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取って、ほ場外に撤去する。
・本県では、定植後から 11 月頃まではすすかび病が多く、次第に葉かび病が優占する傾向が見られる。

●黄化葉巻病

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.2%（平年 1.0%）と平年より少なかった。
・病害虫防除員によると、４名中２名から本病の発生が「やや多い」との報告があった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、本病を媒介するタバココナジラミの発生を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫の発生源や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

・罹病性品種を栽培しており本病の被害が大きい場合は、次年度に耐病性品種への変更を検討する。

●コナジラミ類

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 10.3%（平年 13.3%）と平年よりやや少なかった。

・病害虫防除員によると、４名中３名から本病の発生が「やや多い」との報告があった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため発生を助長する。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4㎜以下）を設置し、侵入を抑制する。

・葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生の増加が見込まれる場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。

●黒斑細菌病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病の発病適温は 25～30℃）。

防除対策

・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。

・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。

・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。

・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。

●白さび病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均発病株率が 0.3%とわずかに確認された（平年発生なし）。

・1 か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生をあまり助長しない（本病の分生子は発芽最適温度が 10℃と低温を好む。しかし、降水量が多い場合は、発生を助長する）。

防除対策

・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行うことが必要である。

・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・本病の媒介虫であるアブラムシ類の寄生は確認されなかった（平年寄生株率 0.4%）。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、アブラムシ類の発生をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

防除対策

・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率 0.1%）。

・浜松市のフェロモントラップにおける直近１か月の誘殺状況は、平年より少なく推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系（IRAC：3A）およびジアミド系（IRAC：28）殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるので薬剤の選定には十分注意する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年寄生株率 1.7%）。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

＜生育の概況＞

生育は５日～10 日遅れている。

●黒腐病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 2.1%）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に暴風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。

・被害残さは感染源となるため、ほ場外で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.02%）。本病は例年生育後半に被

害が増加する（12 月の平年発病株率 0.4%）。

・本病は、降雨があり、15～20℃の気温が続くと発生しやすい。１か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害株は感染源となるため抜取り、ほ場外で土中深く（地下 50cm 以上）に埋めるなど適切に処分する。黒腐病と異なり、浅く埋めただけでは病原菌は死滅しない。

●コナガ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.2%）。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。

・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系（IRAC：3A）およびジアミド系（IRAC：28）殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるので薬剤の選定には十分注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.6%）。

・フェロモントラップ調査における直近１か月の誘殺状況は、静岡市及び御前崎市においては平年よりやや多く、磐田市では平年より多く推移している。

・病害虫防除員によると、本種の発生は「多い」との報告があった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 0.4%（平年 0.8%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏に寄生が多いので、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.9%）。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。

・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くように丁寧に散布する。

【ねぎ（白ねぎ）】

＜生育の概況＞

生育は平年より７日早い～14 日遅れており、管内によってばらつきがある。

●さび病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.04%）。本病は、例年 11 月以降発生が増加する（11 月の平年発病株率 0.3%）。

・本病は多湿を好み、発病適温は 15～20℃である。１か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。

・発病が見られたほ場では早期に薬剤防除を行う。また、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取りほ場外で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、上位３葉の平均発病株率は 4.4%（平年 5.3%）と平年よりやや少なかった。

・10 月中旬のネギアザミウマの平均寄生株率は 52.4%（平年 10.0%）と平年より多かった。

・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は 24～27℃である。また、葉枯病の生育適温は 15～20℃である。１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病（特に黒斑病）の発生を助長する。

防除対策

・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。

・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 2.2%（平年 1.6%）と平年より多かった。

・10 月第１～４半旬の農林技術研究所（磐田市）における予察灯の誘殺数は平年より少なく、フェロモントラップの誘殺数は平年並で推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年 11 月には発生が減少する。但し、卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 52.4%（平年 10.0%）と平年より多かった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・本種は気温が低下した 11 月でも増殖するため（発育零点 10.8℃）、多発した場合は薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、平均被害株率は 2.2%（平年 46.9%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、気温の低下に伴って 11 月には発生が減少するが、食害により葉が真っ白になる被害が認められたほ場では、複数回にわたり薬剤防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。一部定植が遅れたほ場がある。

●斑点細菌病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（本病は比較的低温を好むが、多湿の条件を好むため、降水量が多い場合は発生を助長する）。

防除対策

・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に速やかに防除を行う。

・降雨が続くときや発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。

・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。

●べと病

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。

・１か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は 10～15℃で比較的低温を好むが、多湿は本病の発生を助長するため、降水量が多い場合は発生を助長する）。

防除対策

・予防散布に努める。発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。

・罹病残さはほ場外に処分する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10 月中旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年寄生株率 0.5%）。

・フェロモントラップ調査における直近１か月の誘殺状況は、静岡市及び御前崎市において平年よりやや多く、磐田市では平年より多く推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年 11 月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

【いちご】

＜生育の概況＞

病害虫防除員からの報告によると、花芽の分化は平年よりやや早い地域が多い。

●うどんこ病

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.2%（平年 0.8%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため本病の発生を助長する。

防除対策

・胞子の発芽適温は 20℃前後であり、気温の低下に伴い発生が増加しやすい。

・多発生すると防除が困難になるため、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。特に育苗期に発生がみられたほ場では、見回りと予防散布を徹底する。

・発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため、速やかに除去し、ハウス内に放置しない。

●炭疽病

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.2%（平年 1.9%）と平年より少なかった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病の生育適温は 28℃前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。

・開花～着果期頃、株に負担がかかると潜在感染株では萎凋症状が急速に進展する場合がある。

・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。

・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。

・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にほ場

の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。
・薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC:１）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～M11）を中心に使用する。

●アザミウマ類

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 0.2%（平年 0.1%）と平年よりやや多かった。地域別では、東部及び中遠での寄生は認められず（東部：平年寄生なし、中遠：平年 0.1%）、中部では 0.6%（平年 0.1%）と発生が平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。
・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.6%（平年 4.5%）と平年より少なかった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
・天敵を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●コナジラミ類

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 4.9%（平年 7.2%）と平年よりやや少なかった。地域別では、東部で 1.0%（平年 3.6%）、中部で 4.4%（平年 2.0%）、中遠で 9.4%（平年 10.1%）と中部での発生が平年より多かった。
・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
・葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生の増加が見込まれる場合は薬剤防除を実施する。

●ハダニ類

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 15.9%（平年 12.4%）と平年よりやや多かった。地域別では、東部で 1.2%（平年 3.6%）、中部で 20.8%（平年 9.7%）、中遠で 25.6%（平年 23.6%）と中部で

の発生が平年より多かった。

・１か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。

・天敵製剤を利用する場合は、事前に防除を徹底し、ハダニ類が低密度に維持された条件下で放飼する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

・10 月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 0.8%（平年 0.8%）と平年並だった。

・フェロモントラップ調査における直近１か月の誘殺状況は、静岡市及び御前崎市においては平年よりやや多く、磐田市では平年より多く推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

・フェロモントラップ調査における 10 月の誘殺状況は、浜松市中央区協和町では平年並、浜松市中央区伊左地町及び磐田市富丘では平年よりやや多く推移している。

・１か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

・例年、野外では 11 月まで成虫が発生するため、施設では開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。

・本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下する。そのため、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

３　季節予報

●１か月予報　（東海地方　令和８年１０月２２日　名古屋地方気象台発表）

【予報期間】　１０月２４日から１１月２３日

【予想される向こう１か月の天候】

特に注意を要する事項		期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう１か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率６０％です。
	降水量	降水量は、多い確率５０％です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率５０％です。
１週目	気温	１週目は、高い確率７０％です。
２週目	気温	２週目は、平年並または高い確率ともに４０％です。
３～４週目	気温	３～４週目は、高い確率６０％です。

【確　率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多％
１か月	気温	１０	３０	６０
１か月	降水量	２０	３０	５０
１か月	日照時間	５０	３０	２０
１週目	気温	１０	２０	７０
２週目	気温	２０	４０	４０
３～４週目	気温	１０	３０	６０

【予報の対象期間】

１か月　　：１０月２４日（土）～１１月２３日（月）
１週目　　：１０月２４日（土）～１０月３０日（金）
２週目　　：１０月３１日（土）～１１月　６日（金）
３～４週目　：１１月　７日（土）～１１月２０日（金）

※ 利用上の注意

・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の２分の１より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所　〒438-0803　磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543　FAX 0538-33-0780
ＵＲＬ　https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html